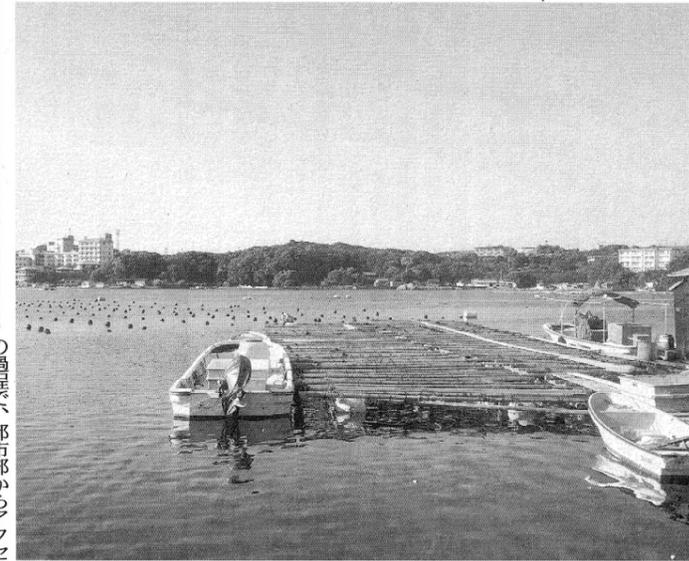


産業TREND

真珠養殖の発祥の地である三重県の英虞（あご）湾は、海の状態の変化、市場の変化、そして、後継者問題が深刻である。本稿では伊勢志摩の魅力の一つである真珠に関する真珠養殖漁場の変化と現場での挑戦について概観し、地方にある本当に美しいものの存在について考えたい。

真珠養殖 入り江に波立つ

地、英虞湾、入り江、水深が深く、美しい海が育つ。美しい真珠を産む。美しい海が育つ。



宝石の海、今と昔

伊勢志摩にはたぐいさんの真珠養殖が並んでいる。すでに世界で初めて真珠養殖に成功したのが、この英虞湾の海であった。英虞湾は真珠養殖の発祥の地となった。志摩半島周辺は大小の島々があるリアス式海岸である。入り江の奥に入り、穏やかで温暖な海が広がる。水深は深く、陸から流れる水は栄養豊富であり、アコヤガイはその海で美しい真珠を育てるのだ。

これまで、戦前の暮らし方の研究のための、90歳ヒアリングで全国各地を訪問してきた。そして最近、JSTの共創の場形成支援プログラム「美食地政学」に基づくグリーンジョブマーケットの醸成共創拠点「プロジェクト」で三重県志摩市や宮城県東松島市を訪問する機会が増えた。そ

未利用資源を活用する 美食地政学

パート2 5

度重なる稚貝大量死で打撃

の過程で、都市部からアクセスが悪く、行きにくい場所には美しいものが存在しているという共通点に気が付いた。なせだろうか。一つは訪問客が少ないため、自然が破壊さ

れずに残っているからだろう。もう一つは新しい文化があまり入ってきいておらず、昔からゆくりと時間が流れているから人々の心にゆとりがあるのではないか。そのため、何事にも深みが出る。技術も研ぎ澄まされる。そして、純粹な心を持つ人が増える。例えば、観光地で発見するその地域の魅力よりも、観光地からさらに奥に入った住民との会話に奥深さや魅力を感じ



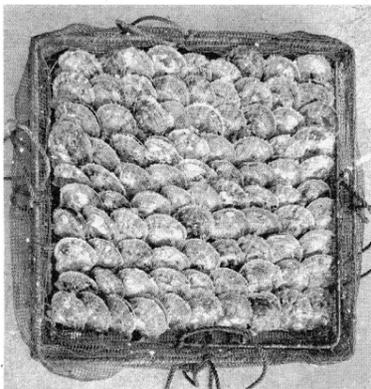
東京都大学環境学部 環境経営システム学科教授 古川 柳蔵

ふるかわ・りゅうそう 72年（昭和47）東京都生まれ。博士（学術）。東京都大学環境学部環境経営システム学科教授。専門は環境イノベーション。戦前の暮らし方、自然が育むものづくり、ライフスタイル変革の研究や地方・都市連携プロジェクトを行う。

さて、どの程度このことに気付いている人がいるだろうか。ほとんどの都市部の人は高級な真珠を都市部の店で購入するにとどまっている。真珠を作り出す美しい海や美しい心を持った生産者に会いに生産現場まで足を運ぶ人は少ない。

伊勢と鳥羽が大きな観光地であるため、人はその先まで足を延ばすことが少ない。多くの人が美しい真珠の作り手たちの心美しい手さばき、そして美しい海を見逃している。本当に美しいものが志摩半島のこの先にそのまま残っているのだ。真珠の美しさを求めるのには、その心と足を踏み入れてほしい。真珠の美しさは、海の状態と作り手の技が生み出しているからだ。

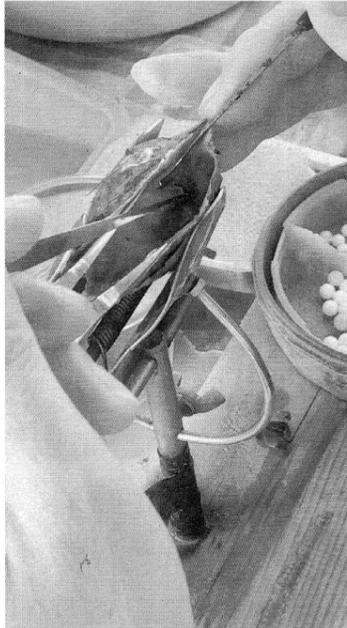
真珠を作るには海と貝と人の手が必要だ。真珠を育てるために、アコヤガイの体内に他の個体の外套膜片と核を挿入する。貝には相当のストレスとなる。手術の後には、その傷が癒えるまでまず穏やかな海で静養させる。冬場の暖かい沖にアコヤガイを移動させる避寒作業は大変である。アコヤガイを守るため、海に吊るされた目を海から揚げ、高波や強風にさらされながら、育っていく。このように長年



アコヤガイに真珠の核を挿入する「手術」を繰り返すために並べられて海に吊る川添氏提供

漁船に積み込む。夏場は、紀伊半島を通過する台風など自然の脅威から守っていく。そして、一定期間養殖したのち収穫する。人が手を入れたことにより、真珠がきれいに育っていく。このように長年

の人の技術と経験の積み重ねによって、美しい真珠が誕生する。ところが今、真珠養殖の現場で異変が起きている。真珠養殖漁場の悪化である。1995年辺りでアコヤガイの大量死が起きている。アコヤガイの赤変病が発生した。病気の発生後、全国の真珠生産量



伊勢と鳥羽が大きな観光地であるため、人はその先まで足を延ばすことが少ない。

地方の深奥、見逃される美しさ

は95年の63%から99年には25%にまで減少した（漁業・養殖業生産統計）。その後、2018年には21%となり、生産量は回復しないまま再び19年からはアコヤガイ稚貝の大量死が発生した。真珠養殖業は大打撃を受けている。病気の原因となるウイルスを特定するのは一筋縄ではいかない。志摩市で真珠養殖業を営む川久パールの川添亨氏は、祖父の時代から手がけていた真珠養殖を24歳で始め、30代の時に真珠を残して社会貢献をしたいとの考えで事業に本腰を入れた。なんと美しいことだろう。決して多くの若者がやらない仕事ではないかもしれぬ、純粹で美しい心が真珠養殖の発祥の地で真珠養殖業を支えている。しかし、現実には真珠養殖業の問題として横たわっている。生産者と消費者の距離は遠く離れている。美しさやおいしさを求めるのであれば、美しさの原点まで足を運ばなければならぬ。決して、生産者は都市部の人の訪問を拒んでおられるのではない、むしろ後継者を探しているのだ。地方の魅力を見出し、そこでとどまるのではなく、もう一歩先に踏み込みたい。美しさの原点にたどり着けば、さらなる美しさを発見できるからである。生産者と消費者が美しいと思えるものを共有できる共創の場が求められる。

強い貝は小さくなる傾向に

伊勢志摩で真珠養殖を行う川久パールの川添亨氏に、近年の真珠養殖の状況変化や今後の展望について聞いた。

「2022年は5月で海水温が20度Cありました。23年は下がって18度Cですが、平均的に2度C上昇しています。4年前にアコヤガイの稚貝が病気でほとんど死んでしまうことがありました。ウイルス説があります。そのため大きい貝が手に入らなくなっています。同じようなアコヤガイの大量死は94年、95年にもありました。その時は新種のプランクトンの発生や感染症が原因でした。ウイルスに強い貝を使うとしたのですが、強い貝は小さくなる傾向にあり、真珠も小さいものしか作れなくなります。貝の次は海の状態が重要です。海では、陸から流れ込む栄養の量が変化しています。大雨が降るだけでも海水温が2度C下がり、塩分濃度が変わります。栄養をどうコントロールするかが重要になってきます。そして、最後に養殖技術が重要です」

「最近では売れていませんが、中国の需要は1.5倍から2倍に増大しています。真珠の価格が高騰しています。真珠の供給が少なくなったことも影響していると思います。3ミリの真珠が売れていますが、7ミリの真珠が作れなくなっているのです。今後は海の状態が変化していくと思いますが、陸上での無給餌養殖は難しいで



川久パール 川添 亨氏

細る生産量、後継者不足で担い手淘汰

す。自然は偉大だと思います。気候変動は人間が原因ですが、自分でコントロールできないので、海の状態変化に合わせて、予測して対応しなければなりません。真剣勝負です。将来的には形の悪い真珠も売れるようにする工夫や男性向けの真珠製品といった新しい価値観を入れていかなければならないでしょう」

「今後の真珠養殖については、環境が変化していったとしても、真珠養殖は残したいと思っています。真珠の販売側は問題ないと思いますが、生産側が淘汰（とうた）されていっています。後継者問題を解決しなければなりません。新たに真珠養殖をするには、ある程度の初期投資は必要になりますが、まず組合員になり、自分の技術を磨ける事業者で働き、漁業権をとれば可能です。今は作れば売れる世界です。もっと周りにも真珠養殖を始める人が増えてほしいと思います。真珠養殖は何が正解か分からないですが、奥が深いです。」

（聞き手・古川教授）